平成29年3月31日
北海道森林管理局

平成28年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要
～ 野幌森林公園ではアライグマは生息区域を拡大 ～

1. 調査項目及び内容

表－1

調査項目	内　容
森林植生	再生活動地における天然更新及び植栽木の再生状況を把握。また、野幌森林公園において良好であると考えられる林相を有する天然林（以下、「良好な自然林」とする）の概要を把握する。
菌類相	台風被害地、良好な自然林、台風被害を受けなかった森林において出現する木材腐朽菌の子実態を採取・同定し、森林の再生段階を菌類の面から権等を行う。
歩行生甲虫相	台風被害地、林縁、林内において歩行性甲虫を捕獲し、得られる種から風倒被害地の再生段階を検討する。
野生動物相	自動撮影装置を用いた調査を実施し、森林の更新に影響を及ぼすと考えられるエゾシカ、特定外来種であるアライグマ、その他記録される野生動物から、野生動物相の健全性について評価を行う。

2. 調査結果

1） 森林植生調査

天然更新木は植栽列の内外で見られるが植栽木を圧迫してはいない。植栽木は年々着実に伸長成長をしていて、ササの稈高を抜きつつある。一方でツル類が樹木の生長を抑制している箇所が部分的に出てきた。ツル類をどのように処置するか考えていく必要がある。全体的に再生段階は第2段階と考えられる。

植栽地：トドマツ(手前)等

植栽地：手前にツル類、奥にクマイザサが見られる

2） 菌類相調査

処理区における重要菌種出現頻度の経年変動をみると、カワラタケやレンガタケの出現頻度が減少するなど、天然林区や人工林区の様相に近づきつつある種もあるが、種構成は天然林区や人工林区とは異なっている。倒木などの腐朽の進行、根株等の菌類の発生環境の乾燥傾向がみられてきているが、再生段階としては、「第１段階」と考えられる。

表－2

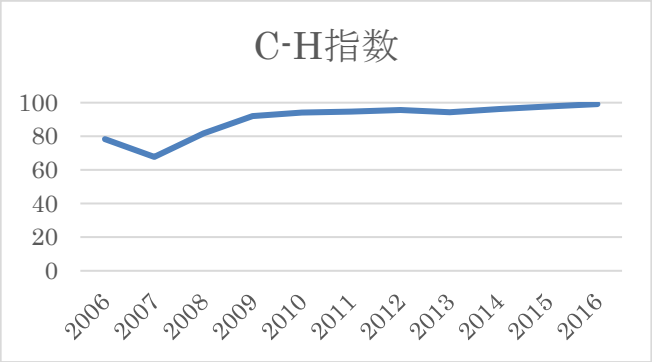
プロット毎の重要菌種出現頻度（2016）

	トドマツ人工林区					天然林区					風倒被害処理区				
和名	34り トド	46に トド	道2 トド	50り トド	トド 計	37ほ 天	38ろ 天	49ろ 1天	51ろ 天	天計	38へ 処	38る 処	41ほ 2処	46に 処	処計
ウスバシハイタケ	3	1	3	3	10			1		1					
スエヒロタケ														1	1
カワラタケ						3				3				1	1
トドマツガンシュビョウキン			1		1										
レンガタケ	2				2								1		1
アラゲカワラタケ															
モミサルノコシカケ	2	4	6		12										
サカズキカワラタケ	2				2	1	1	2		4					
キカイガラタケ													1	1	2
キアシグロタケ															

3） 歩行性甲虫相調査

非森林性種は依然台風ギャップの跡地に残っており、対照区としている自然林の割合には到達しておらず、この後どう変化していくのか予断を許さない部分もあるので、今後のモニタリング調査の継続が重要である。総合的にみて、CH 指数が99%を越え、地表性甲虫群集の中で森林性種の種が占める割合が高くなってきていることから、再生段階は第2段階であると考えられる。

図－１　CH 指数（オサムシ-ゴモクムシ個体数比）＝（森林環境を好むオサムシ亜科個体数）/（（森林環境を好むオサムシ亜科個体数）＋（草原環境を好むゴモクムシ亜科のゴモクムシ個体数＋ゴミムシ個体数））×100〕



4） 野生動物相調査

確認種数と確認種構成については今年度、過年度で大きな違いは見られず、生息するほ乳類相に変化はない。特定外来種であるアライグマについては今年度も過年度同様、広範囲で多数が確認された。在来種への影響などを引き続き注視する必要がある。

エゾシカは、9 月調査で若干の増加が見られたが、引き続き低い撮影頻度で推移している。タヌキはこの２年間、それ以前と比べて顕著な撮影頻度の増加があり、生息数が大きく増加していると推察される。

環境省レッドリストで準絶滅危惧種とされているエゾクロテンが今年度も確認された。

野幌森林は、石狩低地帯の西側では本種の生息が確実な数少ない箇所であると考えられ、今後の動向が注目される。

図－２　年別撮影頻度の推移

問い合わせ先：北海道森林管理局
石狩地域森林ふれあい推進センター
〒064-0809 札幌市中央区南９条西２３丁目１－１０
TEL 011-533-6741
E-mail:h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp